

令和元年6月30日 第61号

瓦版

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付
すいきょう

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



び火 「うしろ姿に」

み お客を送る時には、姿が見えなくなっても、
う埋 すぐに立ち上がることなく、その人の残り
香をしばしなつかしんでからおもむろに奥
へ戻る。まして送り出すやいなや戸を閉めたり、
灯りを消したり、声高に話すなどは、固く慎ま
ねばならない。これは茶道の大切な心がけの一
つでもある。

中江藤樹の母は訪ねてきた我が子を厳しく諭
し追い返したが、雪の中を去って行く少年藤樹
のうしろ姿に手を合わせていた。それを知った
彼は必ず立派な人になろうと心に誓ったとい
う人が見ている時には格好をつけるが、見てい
ないと、気を抜いたりなげやりになったりする。
見ているからやるのでは、それは見せかけのも
のに過ぎない。見せかけには、見せかけの反応
が返ってこよう。

眼は顔だけにあるものではない。うしろの眼
はこころの眼である。

「うしろには眼はない」とは、愚かな言葉だ。
前の眼よりも、うしろの眼の方が怖い。
前の眼はごまかせても、うしろの眼はごまか
せない。心の中をみられてしまう。うしろ姿に
こそ真心をもつて対しなければならぬ。
去っていく人のうしろ姿に深々と頭を下げる人
であるといえよう。

一般的な考え方（武末十治男）

お客・友人・他人に限らずうしろ姿にも手を
合わせるような思いやりの心は必要だと思いま
す。